

世界史の方法を問う

井上幸治監修，M. フェロー著・大野一道訳

『新しい世界史—全世界で子供に歴史をどう
語っているか—』を読んで

二 谷 貞 夫

世界史とは何かと問われて、これが世界史であると答えるのはなかなか難しい。

というよりも、「定型」の世界史は、まだないと言ったほうがよい。

勿論、客観的には世界史は存在する。しかしここで世界史があるとか、ないとか言うのは、叙述された世界史、あるいは、世界史像のことである。

と言うと、すぐに反論がかえってくるだろう。世界史叙述と言うのであれば、人類発祥以来、歴史叙述は行なわれてきたし、そこにはつねに世界像があったと言われるだろう。

しかし、これまでの描かれてきた世界史の多くは、すでに数々の批判がなされてきたようにその最も集約的な表現は、ヨーロッパ中心主義の通時的人類史的世界史であり、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界とが、「先進」・「後進」と言う価値基準の構造をもって描かれ続けてきたのである。いわば、ヨーロッパ諸民族、あるいは諸国の発展にとっての世界史であったといえよう。

また、史的唯物論による「世界史の基本法則」で世界史が描かれ尽くしているか、まだまだ議論の余地の多いところであろう。

大雑把に、世界史認識にかかわる今日の問題状況を以上のようにとらえている。

そんな時にこのマルク・フェローの本書が登場したのである。

本書の内容について、監修者の井上幸治氏は、次の3点に要約している。

第1に、教科書において世界史とはなにかが、ひとつの問題であり、第2に、ヨーロッパ中心主義が、破れたのは、いうまでもなく、各民族が歴史のなかに自己のアイデンティティをもとめたことが起点であり、第3に、世界史の域外におかれた民族も自己の埋もれた歴史を発掘し、自己の歴史を作りあげる、としている。

新しい世界史の意味は、どこにあるのか、と問えば、それは、まさに、これまでのヨーロッパ中心主義の世界史を旧として、その「ひっくりかえし」にもとめられる。本書は、南アフリカ共和国をトップにおいて、次にブラック・アフリカをおき、極めて対象的にアフリカ世界を取り上

げて、これまでの世界史叙述の方法を「ひっくりかえ」そうとしている。続いて、トリニダード、インド、イスラムかアラブか、イランとトルコ、ヨーロッパ、ソ連、アルメニア、ポーランド、中国、日本、合衆国、オーストラリアとメキシコ、と次々とそれぞれの民族や国で子供に歴史をどうかたっているかが、展開されていくのである。

これは、世界史の方法としては、諸民族・諸国民の歴史を共時的に把握しようとするものである。読者の視点もそこにおよばざるをえない。

M. フェローが、「全世界で子供に歴史をどう語っているか」として本書で進めた作業は、地域・民族・国の独自に発達させてきた歴史認識の学問的方法を歴史教科書を通じて批判的に検討し、消化し、その活用の道を辿ろうとしている。訳者は、原著の意を含んで原題をサブタイトルにし、各章の表題を一部かえている。以下、列記しておこう。

- 南アフリカ共和国(「白い」歴史)
- ブラック・アフリカ(植民地時代に教えられた歴史を否定する歴史)
- トリニダード(悪魔払いされた歴史)
- インド(アイデンティティなき歴史)
- イスラムか、アラブか?(宗教のきずなか、民族のきずなか)
- イランとトルコ(イスラム化した非アラブ世界)
- ヨーロッパ(民族的記憶の継承と変形)
- ソ連(歴史の様相と変動)
- アルメニア(民族的アイデンティティの守り手としての歴史)
- ポーランド(横からみた歴史)
- 中国(ゆれ動く歴史記述)
- 日本(歴史はコードか、イデオロギーか?)
- 合衆国(解体する「白い」歴史)
- オーストラリアとメキシコ(「原住民」の禁じられた歴史)

とある。

ここで行なわれた歴史教科書等を通じての分析は、一回性、多系的発展、現代世界の問題構造・問題性が意識されており、歴史認識のカテゴリーとして因果関係のみならず、機能的関係、意味関係の認識がふくまれている。

こうした視座で、M. フェローが、日本の歴史・歴史教育についてどうとらえているか、紙数の許す限り、紹介しながら、コメントしたい。

彼が選択した教科書は戦前のものである。その理由として「今日、40歳から70歳の日本人た

ち、活動的で指導的な層の人びとが手にした本」であり、「日本の歴史のもっとも伝統的なみかたを表わしている（あとでみるように1945年以降、大幅な修正が加えられた）。とはいえ、このみかたがどれよりもいちばん大衆的で、もっとも根を下ろしているのもまちがいない。」としている。そして、教科書から、国体思想を紹介して、今世紀初頭に国体イデオロギーが問題化したことをとりあげている。教科書の役割がこうした中で、教化的なテキストであると位置づけ、歴史話法の役割が、敬けんと忠誠の態度をつくりだす効果をしめすようになってきているという。自己犠牲、勇気、忠誠、不屈といった徳が評価されるとともに天皇権力継承権の安定にも及んでいると言い、「正統継承権を中心にみてゆく傾向の痕跡は残っており、今日でも目にとまる。歴史教科書は、1868年に天皇が権力へ復帰したのはひとつの回帰なのであり、700年 およぶ武家制度のあとをおそった改革なのだ、あらゆる面で立証しようとしている。」と捉えている。また、近代化の過程では、「日本文化の特色が保護されるかぎり、近代化は善だという確信で」「西洋思想を価値づけ、……アジアは否定的特徴でしか紹介されない」としている。そして、西洋思想の価値づけの反動として選民思想が捉えられ、「日本はアジアの庇護者であり、ヨーロッパは永遠の侵略者である」と、戦争中、歴史では教えられたと指摘している。

戦後については、180度の転換も、否定的で、「それぞれのやり方で国体の永続性を確かなものにしていく」とのべ、いわゆる教科書問題を視野にいれている。最後に「日本文化の特殊性をますます強調しながら、歴史話法を少しずつ客観化しているのである……」とむすんでいる。

こうした指摘を自国史と世界史という課題の中でどう読んでいくかが、日本国民の歴史意識の形成と世界史認識にとっての問題提起であろう。

ところで、世界史像の模索として歴史教科書に着眼したことは興味ぶかく読めたが、果たしてこのような分析方法で適切かどうか、これからの課題であろう。

というのも、『新しい世界史』と名づけた程に、日本の世界史教育にとって新しい課題かというところ、これまで歴史研究・歴史教育の場において検討されてきた内容にかかわるものであり、その点では目新しいとはいえないからである。（A4判、頁484 新評論刊1985.10）（筑波大学）